

ま え が き

学校長 江 森 一 郎

本紀要を手にする方は、ほとんどが高校教師の方と思われます。そこで最近の高校の変化に言及し、ここに収録された論考の性格について私の見方を述べてみます。

国家レベルの政策として総合制高校、単位制高校、中等教育学校などなど新しい高校教育政策が次々に打ち出され、地方ではそれらへの対応を迫られ、現場ではそれにかかわる実務や変化に対応した自己改革に日々大変な苦勞が続いているように見受けられます。しかし、金沢大学教育学部附属高校の場合は、国立の大学進学希望者がほとんどを占める学校という意味でも、一般の高校とは違った恵まれた環境にあると思われているのではないのでしょうか？しかし、詳細を述べる場ではないので省きますが、世論の国立大学付属批判への配慮か、文部省からの予算は毎年最小限に限られ、他方で大学改革の一環として人目を引きやすい「改革」を恒常的に迫られ、教員の人材の質などいくつかの点を除けば、他の公立学校より困難な条件、状況が深く静かに広まっています。私は奇しくも9年前にも2年間本校の校長を勤めた経験があるので、こういう事態が実感をともなって感ぜられます。

今回すべてたまたま私が9年前に校長をしていて頃もすでにおられた先生方の論考を一通り目を通して、いずれも生徒の教科指導や健康そのものにかかわるものばかりである事に感慨を深くしました。本校の教官には、いわば各方面の学者とみられる方が過去多数存在しました。そういう方が時に教育実践に直接かわらない高踏的な論文も載せていました。今もそういう傾向の方がおられるのは知っていますが、論文から見る限り執筆者全員が熱心な教師になりきっています。これは、高校教師だから当然といえば当然ですが、天の邪鬼な私には何か一抹の寂しさも感じます。教育の「ゆとり」が十年以上前からいわれながら、教師も生徒も目的や意味が不透明な忙しさにいよいよ追われている時代です。高校教師は学問好きだけではやってゆけない時代になっていると言うことでしょう。

ともあれ、この紀要は、教育熱心で知られた本校教師が日々の実践から生み出した成果です。他校で同様の問題関心をお持ちの方に役立っていただけると信じています。